

機関番号：11301

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520042

研究課題名 (和文) タミル語バクティ詩人・シッターたちの思想と運動
—ラーマリンガルを中心に—

研究課題名 (英文) The Philosophy and Movement of Cittar-s (a Group of Tamil Devotional Poets) with Special Reference to St. Ramalingar

研究代表者

山下 博司 (YAMASHITA HIROSHI)

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：20230427

研究成果の概要 (和文)：

2008年度より開始された本研究プロジェクトにより、2008年度～2010年度において、聖ラーマリンガルを中心とする南インド・タミル地方のシッター的宗教伝統の研究に関連して、著書2 (単著1、共著1)、論文1 (単著)、研究報告2 (単著) の計5点の成果に結実を見た。単著1篇と研究報告1篇をのぞき、すべて英語によるものである。

そのうち、英文での共著1は、関連諸研究者の最新論文集としてインドの首都デリーにあるインド学系学術出版社である Manohar 社から商業出版されることになり、研究成果を国内外に広く発信し得た。学界からも好評を博している。

単著としての『ヨーガの思想』(講談社選書メチエ) では、近代の聖者・ラーマリンガルに連なるタミルのシッターの伝統をインドのヨーガ思想の系譜に位置づけ、思想史・宗教史上の大きな流れの中で論じており、また、著名な出版社からの学術新書 (選書) の一巻として広く学界外にも成果発信を為し得たことも評価されるべきと考える。

関連の学会発表は、日本インド学仏教学会において1回行い、質疑応答を研究の進展と成果の改善に活かすことができた。

研究成果の概要 (英文)：

The present research project, which started in the academic year of 2008, produced totally five publications.

The publications include two books of single and co-authorship, one article and two reports, both of single authorship. Among the above-mentioned publications, three are published in English. In particular, the book of co-authorship, which is the collection of articles of Japanese authors on Indian devotionalism, was published by Manohar, a celebrated Indian publisher widely known with their Indological titles, and widely read among the academic circles.

The publication of single authorship of *Yoga no Shisou (The Philosophy of Yoga)*, published in 2009 as one of the volumes of well-known Sensho Metier Series of the Publisher Kodansha, gained wide acceptance among the reading public of Japan. In that particular publication, the essence of the fruit of this research project on the Tamil Cittar tradition as epitomized by Saint Ramalingar and its significance is presented in a condensed manner. It should be quite noteworthy that the latest outcome of the present research project has become thus widely and promptly open to the public in the format of commercial publication.

One paper, a result of this research topic, was read at related academic conferences and received favourable response.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000

2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	3,400,000	1,0200,000	4,420,000

研究分野：インド宗教思想史、ヒンドゥー教研究、南アジア・東南アジア交流史、南アジア地域研究

科研費の分科・細目：印度哲学・仏教学

キーワード：ヒンドゥー教、バクティ、南インド、タミル語、タミルナードゥ、スイッタール、神秘主義、聖者

1. 研究開始当初の背景

本研究プロジェクトは、これまでのインド思想史・宗教史研究においてほとんど顧みられないことのなかった南インド・タミルナードゥに展開したヒンドゥー教の「スイッタール」たちの宗教伝統を発掘し俎上に挙げたものである。

本研究は、彼らにより形作られてきた伝統に焦点をあて、彼らが詠い上げた膨大な宗教詩の哲学的内容と思想史上の意義および位置づけ、後世（特にタミル近代）の社会思想・社会運動に与えた影響、現代的意義の由来などについて、タミル文献学的方法論を基本に据え、さまざまな視点・手法を駆使し動員して、多方面から多角的に記述・解明しようとする野心的な試みであった。

これまで、諸家の研究によるインド宗教思想史の流れは、ダルシャナ（六派哲学）やシヴァ派・ヴィシュヌ派など、インド哲学・ヒンドゥー教の宗派的な動きが中心に据えられ、それらが織り成す歴史に沿って編まれたものであった。宗派性を廃する動きを見せたスイッタールたちのそれを含む思想の流れは無視されることになったのは、当然の帰結である。

宗派的なインド哲学・神学ないしヒンドゥー教信仰のあり方に反抗し、それに反旗を翻した思想家・宗教家たちの存在と思想内容は、インド思想・宗教の形成史において、正当に評価されてきているとは言えない現状にある。というより、彼らの存在自体が、一部（地元タミルナードゥ）をのぞいて学界に知らしめられることのないままに推移し、あるいは敢えてその存在が抹殺されてきたというのが真実である。偏見を離れたインド哲学・宗教史の構築のために、彼らの伝統の再発見と再評価が急務であることの所以である。

本研究プロジェクトは、彼らの存在に研究の光を照射することにより、偏見のない形で中世ヒンドゥー教史全体を記述し直す

ための第一歩を記すことを大きな使命とするものである。

本研究は、スイッタールという多義的な存在にタミル語古典文献学からの光を充て、翻訳作業棟を通じつつ、その思想内容を精査・吟味することで、南インド、さらにはヒンドゥー教全体の歴史に彼らを的確に位置づけ、近代の社会運動の形成にまで及んだその思想的影響を正当に評価しようとしたものである。

2. 研究の目的

本研究計画の目的とするところは以下の数項目に集約される。

(1) インドのヒンドゥー教史において枢要な位置を占める南インド・タミルナードゥ地域の展開の中で、「スイッタール」という集合的名称を以て伝承されている宗教者ないし宗教詩人たちの思想的・宗教的アイデンティティを、タミル語文献学的手続きをもとに明らかにする。

(2) ダルシャナ（六派哲学）やシヴァ派・ヴィシュヌ派などの宗派的帰属をもとに記述されがちなインド中世のヒンドゥー教史の中に、宗派をもとにしたヒンドゥー教の組織化に異を唱えたタミルナードゥ地方のスイッタールたちの宗教運動を再評価し、的確に位置づける。

(3) 近代タミルナードゥのヒンドゥー教聖者・ラーマリンガルの諸作品を訳出し仔細に検討することにより、彼をタミルナードゥのスイッタールの系譜に的確に位置づける作業を行う。

(4) 聖ラーマリンガルの先駆を為すと目される前近代（17世紀頃？）の聖者・ターユマーナヴァルの諸作品や思想内容を検討して両者の比較を行い、二人の関係性と、後者による前者への影響関係を思想的に明らかにする。

(5) スイッタールたちが提起した宗教観念を、近代の聖ラーマリンガルの神観念を事例に解明する。

(6) スイッタールたちによる宗教実践を、聖ラーマリンガルの宗教実践を事例に解明す

る。「宗教儀礼」の問題をどう扱ったかが焦点となる。

(7) スイッタルたちが後代に及ぼした精神のおよび社会的影響を、中世と近代との結節点に位置する聖ラーマリンガルを事例に解明する。

(8) スイッタルたちによる宗教詩文学の文学性について、聖ラーマリンガルの諸作品を事例に解明する。

(9) 現代鬼まで及ぶ聖ラーマリンガルの事績とその影響を実地にかつ具に検討するために聖地ワダルールを訪れ、聖ラーマリンガ・ミッションなどの活動を調査して、現状を報告する。

3. 研究の方法

(1) タミルナードゥに赴き、関連の僧院(マタ)や大学・研究機関等を訪れて、聖ラーマリンガルを中心とするタミル・スイッタル系の宗教者の諸作品の原典出版を網羅的に収集する。

(2) 収集ののち、基本的にタミル語古典文献学の手法に抛りつつ、歴史学の成果や文学論などの異分野の方法をも逐次援用しながら、重要と見なされるべき諸作品を日本語訳していく。必要に応じて現地の専門研究者(タミル語学者、タミル語文学者、タミル宗教史学者など)とも接触・連携しつつ、正確な日本語訳を施し、適切な内容把握を心がける。

(3) 最近少しずつ現れるようになった個別のスイッタルに関連した研究書・二次資料なども収集し、訳出作業や検討作業の折に随時活用・参照する。それらを以て、スイッタルとその時代の全貌を明らかにする資料とする。

(4) 聖ラーマリンガルに関係する聖地(タミルナードゥ州中部ワダルール村など)を訪れて実地調査を行う。聖ラーマリンガ・ミッション関連の宗教施設の視察や現地でのインタビュー調査などを駆使して、組織の運営等につき最新の情報や知見を収集するとともに、研究資料の充実を図る。ここでは民族誌研究や文化人類学的手法なども自由に援用される。

4. 研究成果

(1) 本研究により、聖ラーマリンガルがタミルナードゥ中世以降に展開したスイッタル系の宗教者・宗教詩人たちの系譜に連なる聖者であることが客観資料を以て示され、偶像崇拜を拒絶する神観念や崇拜方法を指摘した。

これにより、彼の思想傾向が、宗派的なヒンドゥー教の流れと明らかな一線を画し、むしろタミルナードゥの中世に淵源を辿るスイッタル的な流れを汲むものである可能性

が示された。

さらに、聖ラーマリンガルに結実するスイッタルたちの思想と宗教実践が、現代の反ブラーフマン運動にも連なる南インド・タミルナードゥ近代の社会思想・政治思想の形成に直接的にも間接的にも甚大なインパクトを与えたことも示唆することができた。また同時に、近代の思想家としての聖ラーマリンガルにおける、ある種の限界についても指摘し得た。

ただし、正直なところ、その重要性の指摘だけはじゅうぶんに果たし得たものの、スイッタルの文学を「宗教詩文学」として文学論・芸術論の立場からその文学性を吟味するところまでは、今回の研究では立ち至ることはできなかった。この欠を反省材料としつつ、スイッタルたちが残した史文学の「文学性」の詳しい検証については、今後の研究課題としたい。

(2) 本研究プロジェクトの成果は、主として、書籍(商業出版)の刊行と学術論文の出版、研究報告書への執筆、学会発表という3本立てで公開・発信された。直近の研究成果公開は2011年のものになる。

①書籍2点のうちの1点は、講談社からの単著『ヨーガの思想』(選書メチエ)であり、その中で、スイッタルの伝統、特に聖ラーマリンガルの問題にもページを割いている。

専門的成果を、一般の読者も念頭においた出版物に反映させ得たことで、学界内を越えた研究成果の幅広い発信が達成されたと自負している。

②書籍のもう1点は、英文による共著のかたちをとって公にされたものである。金沢大学もと教授・島岩、拓殖大学名誉教授・坂田貞二、他1名の編集になる *The Historical Development of the Bhakti Movement in India: Theory and Practice* で、日本の中世インド宗教研究の最新の成果を盛る論文集の1篇として収載されている。(研究代表者は、本書の編集作業にも、エディティングボードの一員として深く関与し得た。)

同書は、日本南アジア学会の20周年記念研究叢書の1巻として、同学会の資金援助を得て出版されたもので、日本のインド研究の粋を集めたものとの位置づけにある。日本人研究者(研究代表者)による聖ラーマリンガルの研究成果が、英語による商業出版で発信されるのははじめてである。

本書籍は、インドの首都デリーにある著名なインド学系出版社 Manohar 社から出版されたもので、日本のインド思想研究の水準と最新成果を世界に知らしめ、世界のインド研究者・ヒンドゥー教研究者に与えるインパクトは大きいと考えられる。

(なお、この英語論文集は、研究計画終了後の2011年春に出版されている。)

③研究論文としては、日本印度学仏教学会『印度学仏教学研究』に、聖ラーマリンガルの神観念と宗教実践について論じたものが掲載されている。ページ数的には極めて限られたものではあるが、英語による論文であり、成果発信という観点からは、意義の大きいものとする。

④研究報告書に寄稿した2篇は、いずれも研究代表者ないし研究分担者（連携研究者）として、関連する共同研究に従事した成果である。（2本中の1本は英語で著している。）共同研究成果報告書に寄稿されたことで、本研究成果や最新の知見が学会員と直接的に共有し得たことになり、その意義は小さくないとする。

⑤関連する学会発表は日本印度学仏教学会（2008年9月）において1件行っている。聖ラーマリンガルの「聖なるもの」の観念について、「灯火の表象」という視点から論じたものである。本研究プロジェクトの初期の研究成果を早速発信し得たとともに、フロアとのやりとりも経て、出版・公開される研究成果の質の向上に一定の役割を果たすことができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

Yamashita, Hiroshi, "The Absolute as Luminosity: The ideal and movement of Saint Ramalingar", *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol. LVII No.3, 2009, pp.1165-1171.

〔学会発表〕（計1件）

山下博司「聖ラーマリンガルの思想と運動—灯火の表象を中心に—」日本印度学仏教学会、愛知学院大学、2008年9月5日

〔図書〕（計2件）

1. 山下博司『ヨーガの思想』講談社（選書メチエ）、2009年、全246頁

2. Yamashita, Hiroshi, "Saint Ramalingar and the Exemplification of God as Effulgence", Iwao SHIMA, Teiji SAKATA, Katsuyuki IDA (eds.), *The Historical Development of the Bhakti Movement in India: Theory and Practice*, Delhi: Manohar, 2011, pp.265-288.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山下 博司 (YAMASHITA HIROSHI)

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：20230427

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：